

457 大腸穿孔ショック例におけるサイトカインの変動 -PMXの有効性について-

兵庫県立淡路病院外科¹⁾、公立宍粟郡民病院外科²⁾
神戸大学第2外科³⁾

梅木雅彦¹⁾、松田昌三²⁾、高塚二郎¹⁾、西尾渉¹⁾、
木花鋭一¹⁾、喜多泰文¹⁾、小山隆司¹⁾、八田健¹⁾、
栗栖茂¹⁾、岡田昌義³⁾

大腸穿孔ショック例の治療成績改善を目指し、1995年11月から9例の大腸穿孔ショック症例に対しPMXによるエンドトキシン吸着療法を施行した。PMX前後のサイトカインの変動からみたPMXの有効性について報告する。PMX施行9例中3例が手術死亡で1例は肝硬変・肝癌合併例の肝不全死、2例が広範な後腹膜穿孔で感染巣の除去が不可能な症例であった。PMX前にエンドトキシンが高値であった症例は9例中1例のみであった。PMX非施行例では術翌日もIL-6の上昇をみたが、PMX施行例(救命例)ではPMX直後からIL-6は低下し、術翌日には正常化していた。PMX施行死亡例(感染巣除去不能例)ではPMX直後IL-1 β は上昇・IL-6は低下、翌日にはいずれも上昇していた。PMXによりエンドトキシンのみならず、IL-1 β 以降に産生されるメディエーターをも除去し、IL-6等のサイトカインの低下をもたらす病態の改善に寄与するものと考えられる。

458 大腸癌患者周術期高サイトカイン血症の術前危険因子の検討

三重大学第二外科

伊藤秀樹、三木誓雄、木下恒材、松本好市、鈴木宏志
術前の全身状態を反映する因子(栄養状態,免疫能)を評価し、周術期のcytokine responseとの関連を検討した。大腸癌患者35名を対象とし、術前後の血中炎症性サイトカイン(IL-1 β , IL-6)、その拮抗物質(IL-1ra, IL-10)、免疫抑制物質濃度(IAP, TGF- β)を測定した。術中因子、癌の進行度(臨床病期、腫瘍最大径、CEA値)との関連も検討した。(結果)IL-1 β は多くで検出感度以下を推移し、IL-6、IL-1ra、IL-10は術直後に最高値を示した。またcytokine balanceを反映するIL-1ra/IL-6比は術直後に有意に上昇した。重回帰分析では術前ch-E値、術中出血量、術前IL-1ra値が独立して術直後のIL-6値に影響を及ぼしていた。癌の進行度と術後のcytokine responseには関連がなかったが、術前IL-1ra値はCEAと正に相関し、門脈血中のTGF β と負に相関していた。(まとめ)低栄養及び免疫能低下に伴う炎症性サイトカイン拮抗物質産生低下が、周術期の高サイトカイン血症の危険因子であると考えられた。

459 TNF α とIL8からみた消化器外科領域でのサイトカインの意義と治療応用への可能性

防衛医科大学校第一外科

木下学、大淵康弘、上野力、山口圭三、小野聡、
市倉隆、望月英隆

癌転移へのTNF α の関与、ARDSへのIL8の関与を検討した。①癌病巣における検討 大腸癌 drainage vein(DV)中TNF α は全身血中TNF α より有意に高く、かつ全身血中ELAM1と有意に相関した。②癌細胞の血管内皮接着への関連 大腸癌細胞(WiDr)はTNF α 濃度依存性にヒト臍帯静脈血管内皮への接着が増加し、その際ELAM1濃度と連動した。③ARDSにおける検討 重症感染症時のARDS合併例では軽度肺障害合併例や肺障害非合併例に比べIL8が著増した。④エンドトキシン(Et)血症時の検討 Et投与ratのIL8はEt投与2時間後に全身血中でpeakを呈し、これに一致して全身血中の好中球数も最低となった。Et投与2時間後のIL8の臓器流出血液中濃度は肺で肝、腎、腸管より有意に高く肺での好中球の著明な集積を反映していた。【結語】TNF α は癌病巣より産生され、全身血中ELAM1と相関し、ELAM1を介する癌細胞の血管接着への関与が示唆された。IL8はEt血症時の好中球の臓器への遊走、特に肺への遊走に関与し、重症感染症時のARDS併発の一因となることが示唆された。

460 著明なBackwash ileitisを伴い再手術を余儀なくされた潰瘍性大腸炎の一例

北里大学医学部外科

根本祐太、野沢直史、坂本いつみ、根本雄治、
渡辺久美子、細田桂、相原成昭、国場幸均、井原厚、
大谷剛正、比企能樹、柿田章

【はじめに】我々は潰瘍性大腸炎にBackwash ileitisを合併した症例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。【症例】36歳女性【経過】平成8年11月初めより下痢にて発症した潰瘍性大腸炎。発症時よりステロイド坐剤、メサラジン内服にて寛解増悪を繰り返していた。平成9年7月上旬より症状の増悪、著明な貧血(7.8g/dl)を認め、7月29日緊急手術施行となった。術後回腸人工肛門より出血認め、術後三日目、貧血の改善みられず、内視鏡を施行し、Backwash ileitisの診断。同日緊急手術となった。【考察】当院では重症の潰瘍性大腸炎に対し三期分割手術を選択している。その第二期手術としての回腸肛門吻合ため回結腸動脈を温存し回腸を多く残すようにしている。本例はBackwash ileitisを認めていたが、通常の切離範囲にとどめた為、術後出血が続き再手術を余儀なくされた。今後、回腸の切離範囲を慎重に決定すべきと思われた。